微小変形理論と超弾性構成則に基づく 拡張下負荷面モデルの定式化と繰返し負荷挙動予測

東北大学工学部	学生会員	○井口	拓哉
東北大学大学院工学研究科	正会員	山川	優樹
東北大学大学院工学研究科	フェロー会員	池田	清宏

1. はじめに

非古典塑性論に基づく弾塑性モデルの一種として, Hashiguchi^{1),2)}は下負荷面モデルを提案した.下負荷面モ デルは正規降伏面の内部に,それと相似で常に現応力点を 通る下負荷面を仮定し,正規降伏面の内部でも塑性ひずみ が発生し得るとするモデルである.本論文では,正規降伏 面と下負荷面との相似の中心(以下,弾性核と呼ぶ)が塑 性変形に伴って移動することにより繰返し負荷挙動を正確 に表現し得る拡張下負荷面モデル²⁾を採用する.拡張下負 荷面モデルの模式図を図-1に示す.

拡張下負荷面モデルに関する既往の研究の多くは速度形 の亜弾性構成則をベースとし,また移動硬化の背応力や弾 性核の発展則も速度形で規定する定式化がなされている.こ れを有限変形に拡張する際には客観応力速度を用いること となる.しかし,客観応力速度の種類によってはせん断時の 応力振動など明らかに不自然な挙動を示したり,弾性変形 でのエネルギー保存性が保証されないなどの問題点が挙げ られる.そこで本論文では,拡張下負荷面モデルを変形勾 配テンソルの乗算分解に基づく有限変形理論の枠組みで再 定式化するための前段階として,微小変形理論に基づき超 弾性構成則を用いた拡張下負荷面モデルの定式化と弾性予 測子/リターンマッピングによる応力計算法を開発し,数 値実装を行った.



2. 拡張下負荷面モデルの定式化

三次元モデルについて述べる.ここでは等方線形弾性体 の超弾性構成式を用いる.ひずみについては全ひずみ ϵ の 弾性ひずみ ϵ^{e} と塑性ひずみ ϵ^{p} への加算分解と,非線形移 動硬化を考慮したレオロジーモデルに準じて,背応力 α と 弾性核cのそれぞれについて塑性ひずみのエネルギー貯留 部分と消散部分への加算分解を導入する.

$$\boldsymbol{\varepsilon} = \boldsymbol{\varepsilon}^{\mathrm{e}} + \boldsymbol{\varepsilon}^{\mathrm{p}}, \quad \boldsymbol{\varepsilon}^{\mathrm{p}} = \boldsymbol{\varepsilon}^{\mathrm{p}}_{\mathrm{ks}} + \boldsymbol{\varepsilon}^{\mathrm{p}}_{\mathrm{kd}}, \quad \boldsymbol{\varepsilon}^{\mathrm{p}} = \boldsymbol{\varepsilon}^{\mathrm{p}}_{\mathrm{cs}} + \boldsymbol{\varepsilon}^{\mathrm{p}}_{\mathrm{cd}} \qquad (1)$$

ここで,下添え字 'k' は移動硬化, 'c' は弾性核に関連する ことを意味し, 's' はエネルギー貯蓄, 'd' はエネルギー消 散に関連することを意味する.

また,降伏条件は金属一般を対象とした von Mises 型を 採用した.下負荷面式 $f_{sub} = 0$ は以下で定義する.

$$f_{\rm sub}(\boldsymbol{\sigma}, \boldsymbol{\alpha}, q, \boldsymbol{c}, R) = \sqrt{\frac{3}{2}} \|\boldsymbol{\sigma}_{\rm mod}^{\rm dev}\| - Rq = 0$$
 (2)

qは等方硬化の応力変数を示す.また、 σ_{mod} は拡張下負荷面 モデルにおける修正応力であり、 $\sigma_{mod} := (\sigma - c) - R(\alpha - c)$ と定義する.さらに上添え字 dev は偏差応力を示す.式(2) において、正規降伏比 $R \ge R = 1$ とすると式(2)は正規降 伏面 $f_{yld} = 0$ に一致する.さらにこのとき、 $\sigma_{mod} = \sigma - \alpha$ となり、古典塑性論の移動硬化モデルの修正応力に一致する.

塑性流動則は以下のように定義する.

$$\dot{\boldsymbol{\varepsilon}}^{\mathrm{p}} = \dot{\boldsymbol{\lambda}} \boldsymbol{\gamma}^{\mathrm{p}} \tag{3}$$

ここで, $\dot{\lambda} \ge 0$ は塑性乗数である.ここでは関連流動則を用いることとし、塑性変形の進展方向を規定する γ^{p} として現応力点における下負荷面の単位外向き法線 n_{sub} を用いる.

$$\gamma^{\mathrm{p}} = \boldsymbol{n}_{\mathrm{sub}}, \quad \boldsymbol{n}_{\mathrm{sub}} = \frac{\partial f_{\mathrm{sub}}}{\partial \boldsymbol{\sigma}} / \left\| \frac{\partial f_{\mathrm{sub}}}{\partial \boldsymbol{\sigma}} \right\| = \frac{\boldsymbol{\sigma}_{\mathrm{mod}}^{\mathrm{dev}}}{\|\boldsymbol{\sigma}_{\mathrm{mod}}^{\mathrm{dev}}\|} \quad (4)$$

正規降伏比 R の発展則は以下の通りである.

$$\dot{R} = U(R) \|\dot{\boldsymbol{\varepsilon}}^{\mathrm{p}}\| = \dot{\lambda} U(R) \tag{5}$$

ここで,U(R)は正規降伏比Rの発展の仕方を規定する関数であり,変数として応力 σ ,背応力 α ,等方硬化q,弾性核応力cを加えて拡張した式(6)により繰返し負荷挙動の性質をより正確に表すことができる.

$$U := U(\boldsymbol{\sigma}, \boldsymbol{\alpha}, q, \boldsymbol{c}, R)$$

= $u_0 \exp[u_c R_c(\boldsymbol{n}_{sub} : \boldsymbol{n}_{core})] \cot\left(\frac{\pi}{2} \frac{\langle R - R_e \rangle}{1 - R_e}\right)$ (6)

 $\langle \bullet \rangle$ は Macaulay の括弧, R_c は正規降伏面に対する弾性核面の比, R_e は正規降伏面に対する純粋弾性域比, $u_0(>0)$ と $u_c(\geq 0)$ は下負荷面の発展係数, n_{core} は弾性核面の単位外向き法線である.その他の内部変数の発展則は省略する.

3. リターンマッピングアルゴリズム

本論文ではリターンマッピングによる応力の引き戻し操 作を拡張下負荷面モデルに拡張させる.

ある時間区間 $[t_n, t_{n+1}]$ について材料応答が弾性であると 仮定し,新たな塑性変形が発展しないものとして弾性試行 状態を計算する.弾性試行状態における応力・ひずみ・内部 変数の諸量をまとめて弾性予測子と呼ぶ.まず,弾性試行

Key Words: 微小変形理論, 超弾性構成則, 拡張下負荷面モデル, 弾性核, 弾性予測子, リターンマッピング 〒980-8579 仙台市青葉区荒巻字青葉 6-6-06 東北大学大学院工学研究科土木工学専攻 数理システム設計学研究室, Phone: 022-795-7420, Fax: 022-795-7418

状態における下負荷面関数 $f_{\text{sub},n+1}^{(\text{tri})}$ と下負荷面関数の正規 降伏比 R を材料定数 R_{e} で置き換えた関数 $f_{\text{sub},n+1}^{(\text{ela})}$ を考え る.そして次式を用いて負荷判定を行う.上添え字 (tri) は 弾性予測子であることを示す.

$$\begin{cases} f_{\mathrm{sub},n+1}^{(\mathrm{tri})} \leq 0 \text{ or } f_{\mathrm{sub},n+1}^{(\mathrm{ela})} \leq 0 & \rightsquigarrow 弾性除荷 \cdot 中立 \\ f_{\mathrm{sub},n+1}^{(\mathrm{tri})} > 0 \text{ and } f_{\mathrm{sub},n+1}^{(\mathrm{ela})} > 0 & \rightsquigarrow 塑性負荷 \end{cases}$$
(7)

式(7)で弾性除荷・中立と判定された場合は,試行応力を そのまま更新値として採用する.

塑性負荷と判定されたときは、塑性発展式を時間区間で 積分して得られた式と式 (2)の下負荷面式を連立させてリ ターンマッピングを行う、解くべき連立方程式は式 (8)で 示され、未知数 $\epsilon_{n+1}^{p}, \epsilon_{kd,n+1}^{p}, \xi_{n+1}, \epsilon_{cd,n+1}^{p}, R_{n+1}, \Delta \lambda$ につ いて非線形であるため、Newton-Raphson法を用いて解く、 ξ は等方硬化に関するひずみ変数を示す.

$$\begin{cases} \mathbf{Y}_{1} := \boldsymbol{\varepsilon}_{n+1}^{p} - \boldsymbol{\varepsilon}_{n+1}^{p,(\text{tri})} - \Delta \lambda \boldsymbol{\gamma}_{n+1}^{p} = \mathbf{0} \\ \mathbf{Y}_{2} := \boldsymbol{\varepsilon}_{\text{kd},n+1}^{p} - \boldsymbol{\varepsilon}_{\text{kd},n+1}^{p,(\text{tri})} - \Delta \lambda \boldsymbol{\gamma}_{\text{k},n+1}^{p} = \mathbf{0} \\ Y_{3} := \boldsymbol{\xi}_{n+1} - \boldsymbol{\xi}_{n+1}^{(\text{tri})} - \Delta \lambda \boldsymbol{\gamma}_{i,n+1}^{p} = \mathbf{0} \\ \mathbf{Y}_{4} := \boldsymbol{\varepsilon}_{\text{cd},n+1}^{p} - \boldsymbol{\varepsilon}_{\text{cd},n+1}^{p,(\text{tri})} - \Delta \lambda \boldsymbol{\gamma}_{\text{c},n+1}^{p} = \mathbf{0} \\ Y_{5} := R_{n+1} - R_{n+1}^{(\text{tri})} - \Delta \lambda U_{n+1} = \mathbf{0} \\ Y_{6} := \sqrt{\frac{3}{2}} \| \boldsymbol{\sigma}_{\text{mod},n+1}^{\text{dev}} \| - R_{n+1}q_{n+1} = \mathbf{0} \end{cases}$$
(8)

残差ベクトルをY,未知量ベクトルをX

 $(X := [\varepsilon_{n+1}^{p}, \varepsilon_{kd,n+1}^{p}, \xi_{n+1}, \varepsilon_{cd,n+1}^{p}, R_{n+1}, \Delta \lambda]^{T})$ とし,式 (8)のテンソル成分を並べて形式的に列ベクトル表示する. ここで Y,X は 30 成分のベクトルである.反復計算にお ける未知量ベクトル X の修正量 δX について線形化すると 以下の通りである.

$$\boldsymbol{Y}(\boldsymbol{X}^{(k)}) + \frac{\partial \boldsymbol{Y}}{\partial \boldsymbol{X}} \Big|_{\boldsymbol{X}^{(k)}} \cdot \delta \boldsymbol{X} = \boldsymbol{0}$$
(9)

上添え字 (k) は第 k 回目の反復計算における値であること を示す. $\frac{\partial Y}{\partial X}$ は Jacobi 行列であり, 30 × 30 の行列である. 式 (9) を δX について解くと, Newton-Raphson 法による 未知量ベクトル X の更新手続きは次式の通りである.

$$\delta \boldsymbol{X} = -(\boldsymbol{J}|_{\boldsymbol{X}^{(k)}})^{-1} \cdot \boldsymbol{Y}(\boldsymbol{X}^{(k)}) \rightsquigarrow \boldsymbol{X}^{(k+1)} := \boldsymbol{X}^{(k)} + \delta \boldsymbol{X}$$
(10)

上式の更新手続きを反復的に行い,次式の収束判定基準を 満たしたら求解完了とする.

$$\|\boldsymbol{Y}(\boldsymbol{X}^{(k+1)})\| < \text{TOL}$$
(11)

4. 数値計算例

上で定式化した拡張下負荷面モデルの一次元,三次元モ デルそれぞれについてリターンマッピングにおける収束性 と,数値計算精度について検証した.図示は省略するが,リ ターンマッピングアルゴリズムでは単純せん断において最

大でせん断変形 γ = 0.2 のひずみを 1 ステップで与えても高 い収束性が得られることを確認した. ここでは紙面の都合 により一次元モデルの計算精度の検証結果を示す.図-2(a) に示すように下負荷面が正規降伏面と一致する (R = 1) ま で単調負荷をした点 A を解析開始点とし, そこから逆方向 の軸ひずみを与える解析を行う.ここで、軸ひずみを1ス テップで与えたものを数値解とする. 理論解を得ることは 困難であるので、軸ひずみを1000ステップに等分割して計 算した値を正解として用いる. 正解に対する数値解の相対 誤差と軸ひずみの関係を示した図-2(b) より,軸ひずみが 0.03 より小さい範囲では極めて大きな相対誤差が生じてい ることが分かる.この誤差発生の要因分析として,点Aか らの軸ひずみが 0.005 の場合について,図-3 に現応力点 σ の位置と $f_{sub} = |\sigma_{mod}| - Rq \le 0$ で与えられる下負荷面内 部領域における応力の範囲の推移を示した.この結果より, 1ステップで変形を与えると, 逆負荷過程で弾性除荷から 塑性負荷に転じる非古典塑性論特有の下負荷面の拡大・縮 小プロセスが正確に計算できないことがある.



図-3 正規降伏比 *R* = 1 の状態から逆方向に 0.5%ひずみを与えたときの現応力点の位置と下負荷面内の範囲.

5. おわりに

今後は上で述べた問題点の解決に取り組むとともに,有 限変形の枠組みでの定式化にも試みる所存である.

参考文献

- 1) Hashiguchi, K.: Constitutive equations of elastoplastic materials with elastic-plastic transition, *Journal of Applied Mechanics (ASME)*, Vol. 47, pp. 266–272, 1980.
- Hashiguchi, K.: Subloading surface model in unconventional plasticity, *International Journal of Solids and Structures*, Vol. 25, pp. 917–945, 1989.